

魂の故郷

(昭和十二年寮歌)

山崎善陽君 作歌
平城鷹雄君 作曲

一
魂の故郷に立つ

星清き榆の園よ

花芳る三春の夢

感激の涙あふれて

原始林蔭に盃かはす

青春き日の記念の宴

歌ふなり

自治と自由の高き誇を

二

六十年の青史は薫り

郭公の啼声もはるかに

紺青の入相の空

魂は虚空に走せて

住昔の意気を慕ふ

尽きるなき川のせせらぎ

夢ふかし

残春あはきポプラ並木よ

三

いで湯湧く郷の宴は

夜もすがら感激はてなき

絢爛たる瞬間の夢

落葉松の林時雨れて

颯々の悲歌の調べは

榆鐘の響と闇にきえゆく

さびしらに

秋深みゆく静寂の都

四

颯々の暴風おさまり

際涯なき雪の荒野に

皎々と月光冴ゆる

櫓の音の玻窓にこほりて

限りなき瞑想をさそふ

悠久の時の流転

人の世の

悲しき運命ぞ明日の旅路は

五

曠野に高嘯ふ恵迪の健児

毅然たり若き生命よ

先人の崇き訓戒に

大いなる野心育む

慨世の憂はあれど

ここ暫し休息もとめて

いざ寮友よ

のこりの春を惜しまざらめや